

教科書から見る高等学校での「日本漢文」の扱いについて

— 次期学習指導要領に向けての予備調査として —

国語科 渡邊寛吾

「古典B」の学習内容には「日本漢文」が含まれ、その教科書には「日本漢文」という単元が設定され、作品が掲載されている。その教科書に載せられた作品を検討することから、現在の「日本漢文」の持つ問題点を指摘し、令和4（2022）年度より実施となる次期学習指導要領での「日本漢文」の在り方を考える材料とすることを目的とする。

<キーワード> 学習指導要領 教科書 日本漢文 漢文教育 古典探究

1. はじめに — 現行学習指導要領、及び次期学習指導要領における「日本漢文」 —

現行の学習指導要領では、「国語総合」で扱う古典の教材としての「日本漢文」について、「3 内容の取り扱い」中の「(6) 教材については、次の事項に留意するものとする」の中でも、そしてそれに対する解説においても、特に言及することはしていない。

それが、「古典A」においては、「3 内容の取り扱い」中の(3) イとして「教材には、古典に関連する近代以降の文章を含めること。また、必要に応じて日本漢文、近代以降の文語文や漢詩文などを用いることができること」（下線—引用者。以下、同じ）とあり、それに対して解説では、

「日本漢文」とは、上代以降、近世に至るまでの間に日本人がつくった漢詩と漢文とをいう。これは本来、古典としての漢文に含まれるものである。我が国の文化において漢文が大きな役割を果たしてきたことや、日本人の思想や感情などが、漢語、漢文を通して表現される場合も少なくなかったことなどを考え併せると、日本漢文の適切な活用を図る必要がある、ここで改めてしめしている。と定義し、説明を加えて、日本漢文の教材としての使用に言及している。なお、指導要領で「用いることができる」と可能性を指摘するに留まるのは、「古典A」では「古文と漢文の両方又はいずれか一方を取り上げることができる」という、漢文を必須としないことに起因するのであろう。対して、「古典B」では、古文と漢文、両方の学習を必須としており、「3 内容の取り扱い」中の(4) イに「教材には日本漢文を含めること。また、必要に応じて近代以降の文語文や漢詩文、古典についての評論文などを用いることができる」とあって、日本漢文を教材とすることを定めている。

では、令和4（2022）年度より実施となる次期学習指導要領では、「日本漢文」はどのように位置付けられているのであろうか。

次期学習指導要領では、「国語総合」中の古典分野は「言語文化」として、一つの科目として独立して扱われることとなっている。そのため、「国語総合」では明文化されていなかった、歴史的・文化的側面からの言及が「言語文化」には存在する。それは、「2 内容」の〔知識及び技能〕の項目中に、

(2) 我が国の言語文化に関する次の項目を身につけることができるよう指導する。

ア 我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること。

イ 古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解すること。

(中略)

オ 言文一致体や和漢混交文など歴史的な文体の変化について理解を深めること。

などと書かれている。「外国の文化との関係」や「歴史的・文化的背景」が全て中国のことに限定されるものでないのは、解説にもある通り勿論のことであるが、ただやはりその割合の大半を占めるのは確かであろう。この状況を受けて、「言語文化」での「3 内容の取り扱い」として、(4)アに「内容の〔思考力、判断力、表現力等〕の「B読むこと」の教材は、古典及び近代以降の文章とし、日本漢文、近代以降の文語文や漢詩文などを含める」と記されている。そして、解説では先に引用した現行学習指導要領の「古典A」の説明が利用されている。つまり「古典A」、乃至は「古典B」での学習内容を、しかも「古典A」では必須ではなかったものが、「言語文化」という高校1年生時点での必須内容として扱われることになるのである。

そして、「古典A」と「古典B」を引き継ぐこととなる、「古典探究」では「2 内容」の〔知識および技能〕の(2)のアで「古典などを読むことを通して、我が国の文化の特質や、我が国の文化と中国など外国の文化との関係について理解を深めること」と、「言語文化」では「外国の文化」とだけであったものが、「中国など外国の文化」へと変更される。また、「3 内容の取り扱い」には(3)のアに教材として「古典としての古文及び漢文とし、日本漢文を含める」とあって、結果として「言語文化」、「古典探究」の両方で「日本漢文」が教材として掲載されるようになっていく。

さて、そのような状況の中で、筆者はこれから「日本漢文」をどのように扱っていくべきなのか、今後の在り方について検討していきたいと考えている。そこでまず本稿では、現在、採択されている「国語総合」や「古典A」、そして「古典B」の教科書¹⁾の中で「日本漢文」としてどのような作品が掲載されて、どのように扱われているのかを検討していくこととする。

2. 教科書に見える日本漢文

現時点で使用可能な「国語総合」の教科書は5社、12種類、「古典A」の教科書は7社、11種類、「古典B」の教科書は10社、20種類である。では、それぞれの教科書の中で、どのような作品が採られ、どのように載せられているのかを見ていきたい。

まず、「国語総合」であるが、既に見たようにここでは「日本漢文」の掲載は必須のこととはされていない。勿論、掲載が認められていない訳ではないが、単元、そして教材としては取り上げられてはいない。次に「古典A」について見ていく。「古典A」は「古文と漢文の両方又はいずれか一方を」学習すればよく、漢文の学習が必ずしも求められるものではないのだが、11種類の教科書の内、7種類が古文と漢文とを扱っており、残り4種類は古文のみで、漢文のみを教材としている教科書は無い。ただし、漢文を扱う教科書でも、単元、もしくは教材として「日本漢文」を扱うものは無い。では、「古典B」といって、20種類の内、18種類が「日本漢文」を単元として取り上げ、複数の作品を掲載している。

そこで次頁以降にその18種類の教科書²⁾を出版社、教科書名(教科書番号)と、「古典B」は高校2、3年生の2年間で使用することから前期・後期の2部に分けられているため、前期として高校2年生での学習となる単元名と教材(作者/作品)、後期として高校3年生での学習となる単元名と教材(作者/作品)を掲載のままに表として纏めたものを示しておいた。

出版社	教科書名	前期／単元	教材①	教材②	教材③	教材④	教材⑤	教材⑥	教材⑦
東京書籍	新編古典B (古B329)	無							
東京書籍	精選古典B新版 (古B330)	2 詩1 日本の漢詩	広瀬淡窓／ 桂林莊雜詠 示諸生	夏目漱石／ 題自画					
東京書籍	精選古典B漢 文編(古B 332)	2 詩1 日本の漢詩	広瀬淡窓／ 桂林莊雜詠 示諸生	夏目漱石／ 題自画					
三省堂	高等学校古典 B漢文編(古 B334)	7 日本の 漢詩文	菅茶山／冬 夜読書	頼山陽／泊 天草洋	広瀬淡窓／ 桂林莊雜詠 示諸生	飯田黙叟／ 款冬一枝	正岡子規／ 送夏目漱石 之伊予	夏目漱石／ 題自画	森鷗外／航 西日記
三省堂	精選古典B改 訂版(古B 335)	7 日本の 漢詩文	菅茶山／冬 夜読書	頼山陽／泊 天草洋	広瀬淡窓／ 桂林莊雜詠 示諸生	正岡子規／ 送夏目漱石 之伊予	夏目漱石／ 題自画	森鷗外／航 西日記	古典の扉 日本の漢詩 文
教育出版株 式会社	新編古典B言 葉の世界へ (古B309)	無							
教育出版株 式会社	精選古典漢文 編(古B337)	日本の漢詩 文	菅茶山／冬 夜読書	広瀬淡窓／ 桂林莊雜詠 示諸生	正岡子規／ 送夏目漱石 之伊予	夏目漱石／ 題自画	頼山陽／信 玄と謙信		
教育出版株 式会社	古典B(古B 338)	日本の漢詩 文	菅茶山／冬 夜読書	広瀬淡窓／ 桂林莊雜詠 示諸生	正岡子規／ 送夏目漱石 之伊予	夏目漱石／ 題自画	頼山陽／信 玄と謙信		
大修館書店	古典B改訂版 漢文編(古B 340)	6 日本の 漢詩文	菅茶山／冬 夜読書	広瀬淡窓／ 桂林莊雜詠 示諸生	月性／将東 遊題壁	夏目漱石／ 題自画	頼山陽／所 争在弓箭		
大修館書店	精選古典B改 訂版(古B 341)	3 漢詩 わが国の漢 詩	広瀬淡窓／ 桂林莊雜詠 示諸生	月性／将東 遊題壁	夏目漱石／ 題自画				
数研出版株 式会社	改訂版古典B 漢文編(古B 344)	無							
明治書院	新精選古典B 漢文編(古B 346)	無							
明治書院	新高等学校古 典B(古B 347)	無							
筑摩書房	古典B漢文編 改訂版(古B 349)	漢詩〈近体 詩〉	菅原道真／ 聞旅雁	新井白石／ 即事	夏目漱石／ 無題				
第一学習社	高等学校改訂 版古典B漢文 編(古B351)	漢詩の鑑賞 日本の詩	菅原道真／ 不出門	菅茶山／冬 夜読書	正岡子規／ 送夏目漱石 之伊予				
第一学習社	高等学校改訂 版古典B(古 B352)	漢詩の鑑賞 日本の詩	菅原道真／ 不出門	菅茶山／冬 夜読書	正岡子規／ 送夏目漱石 之伊予				
第一学習社	高等学校改訂 版標準古典B (古B353)	漢詩の鑑賞 日本の詩	菅原道真／ 不出門	菅茶山／冬 夜読書	正岡子規／ 送夏目漱石 之伊予	コラム 漢 詩と日本文 学			
桐原書店	新探究古典B 漢文編(古B 355)	3 詩 日 本の漢詩	菅原道真／ 不出門	頼山陽／題 不識庵撃機 山図	中野逍遙／ 思君	成島柳北／ 火輪車中之 作	コラム 日 本漢詩		

後期／単元	教材⑧	教材⑨	教材⑩	教材⑪	教材⑫
5 日本の漢詩文	広瀬淡窓／桂林莊雜詠示諸生	正岡子規／送夏目漱石之伊予	夏目漱石／風流人未死	頼山陽／所争不在米塩	頼山陽／諸将服信玄
無					
1 史話	頼山陽／所争不在米塩	頼山陽／諸将服信玄			
無					
無					
6 日本の漢詩文	菅原道真／九月十日	菅茶山／冬夜読書	広瀬淡窓／桂林莊雜詠示諸生	夏目漱石／題自画	頼山陽／信玄と謙信
無					
無					
無					
無					
日本漢文	菅原道真／梅花	絶海中津／題野古島僧房壁	夏目漱石／題自画	頼山陽／川中島	
6 日本漢詩文	菅原道真／読家書	石川丈山／富士山	夏目漱石／無題	佐藤坦／惜陰	頼山陽／能登殿最期
6 日本漢詩文	菅原道真／聞旅雁	石川丈山／富士山	原念斎／徂徠貧居	佐藤坦／惜陰	漢文の窓⑧ 日本漢詩文
史伝	頼山陽／信玄何在				
無					
無					
無					
無					

まず、高校2年生と3年生と言う、学習時期の違いに注目してみると、18種中11種類が高校2年生のみでの学習、2種類が高校2、3年生それぞれで学習を行い、5種類が高校3年生のみでの学習となっている。高校2年生で学習するもので漢詩と漢文の両方を教材として載せるのは5種類、漢詩のみが6種類である。対して、高校3年生で学習を行うようになっている5種類は全てが、漢詩、漢文を教材として載せている。そして、高校2、3年生の2年間で「日本漢文」を学習する2種類の教科書は共に高校2年生では漢詩を、3年生では漢文を扱っている。それは作品の内容として、漢詩の方が理解しやすいであろうことを考えて分割しているのであろう。これらの状況から高校2年生での学習の程度を考慮して、2年生では漢詩のみでよしとする傾向が、一方で3年生では漢文学習の深まりから漢詩、漢文の両方の学習が可能であるとして、漢詩と漢文の両方を教材として載せていると指摘できるのではないだろうか。

具体的な作品についての検討は後に行うが、教材としては、最も多いのが三省堂の2種類の教科書で七つ教材を載せるものである。そこには漢詩が6首と漢文、もしくはコラムが一つ載る。それ以外は大凡、漢詩が3首程度、漢文は史話から逸話の一つ、乃至は二つ載せる。そして採用されている作品についてであるが、同一出版社の教科書間で作品が共通することは理解できるが、出版社を超えて幾つかの作品が共通して掲載されている。広瀬淡窓「桂林荘雑詠 示諸生」や夏目漱石「題自画」の漢詩、漢文の頼山陽「日本外史」などは定番教材と言えそうな様相を呈している。これらのことから、「我が国の文化において漢文が大きな役割を果たしてきたことや、日本人の思想や感情などが、漢語、漢文を通して表現される場合も少なくなかったことなどを」知ると言う「日本漢文」を学ぶ意味を考えた時、果たして適切な様相を示しているのであろうかという思いを抱いてしまう。では、次にそこに採られた作品について見ていきたいと思う。

3. 掲載作品についての検討

改めて採用されている作品について検討していきたいと思う。

編集方針が共通するであろうことを考えるならば、同じ出版社で作品が共通することは当然と言えるかもしれない。そこで、9社ある出版社毎で共通する作品を見てみると、漢詩は、

- ① 広瀬淡窓「桂林荘雑詠 示諸生」 5社／10種類
- ② 夏目漱石「題自画」 5社／10種類
- ③ 菅茶山「冬夜読書」 4社／9種類
- ④ 正岡子規「送夏目漱石之伊予」 4社／8種類

となっている。漢文は頼山陽『日本外史』が6社で9種類の教科書で採用されている。載せられる内容は源平の合戦から「能登殿最期」を採るものが一つあるが、上杉謙信が武田信玄に塩を送ったという逸話「所争不在米塩」が最も多く、他の幾つかも謙信と信玄に関する逸話を載せる。戦国時代の、特にこの両者の逸話は高校生の興味を喚起するであろうということであろう。ただし、そもそも漢文は7社しか採用しておらず、作品としては『日本外史』が圧倒的な割合を占める。なお、残るのは三省堂の教科書2種類、共に森鷗外「航西日記」である。このことに注目すると、教育出版社の教科書、古B337と古B338などはこの五つの作品で単元が構成されていると言える。対して、前掲の表で言えば、数研出版社以下の5社の教科書は、先の作品採用の傾向からは外れる所があり、特に明治書院ではそれが顕著である。ただし、理由は不明であるが、これらでは菅原道真の漢詩の掲載が共通していることが見て取れる。

そして、その内容にも一つの傾向が指摘できる。それを知るために、広瀬淡窓と菅茶山の漢詩を次に載せる。それは、

桂林荘雜詠 示諸生 広瀬淡窓

休道他郷多苦辛 同袍有友自相親 道ふことを休めよ他郷苦辛多しと 同袍友有り自ら親しむ

柴扉暁出霜如雪 君汲川流我拾薪 柴扉暁に出づれば霜雪のごとし 君は川流を汲め我は薪をはんとあつて、その内容は自分の許に集った学生達に学問に励むことを促すものであり、また、

冬夜読書 菅茶山

雪擁山堂樹影深 檐鈴不動夜沈沈 雪は山堂を擁して樹影深し 檐鈴動かず夜沈沈

閑収乱帙思疑義 一穗青灯万古心 閑かに乱帙を収めて疑義を思ふ 一穗の青灯万古の心

は自身の夜に読書に勤しむ姿を詠むものである。そして月性の「将東遊題壁」が学問のために遊学へと向かうことや漢文であるが佐藤坦「惜陰」で若者に時間を惜しむことを説くものなども加えてみるならば、この少ない作品数でこのような内容の作品が偏ることは、高校生に対して勉学をすることを示そうとする、教導的なものを感じてしまう。正岡子規の夏目漱石に送った詩、そもそも友情と別れという主題が共に漢詩では古くからの大きな主題であり、この二人が近代文学史で持つ重要性からのことだと考えられるが、『日本外史』の謙信と信玄の「所争不在米塩」と併せてやはり、人としての方向性を示しているように思うのである。

勿論、教育である以上、教訓めいた内容となることはある程度致し方のないこととは言えようし、和歌や伊勢物語や源氏物語などが花鳥風月、恋愛を主題とするものとの対比として漢詩、漢文を設定するものと考えられなくもない。しかしながら、国語という教科、その教材が道徳的な、教訓的なものが目立つことはしばしば指摘されることであり、また「日本漢文」の教育内容に和歌や日本文学との対比が想定されてはいないようである。とするならば、教材の選択について今少し検討する余地があるのではないだろうか。

そのことは掲載作品の年代からも指摘できる。そこに載る人物で最も古いものは、平安時代の菅原道真で、次いで室町時代の絶海中津、そして大半が江戸時代の新井白石、菅茶山、頼山陽、広瀬淡窓、明治時代の正岡子規、夏目漱石となる。そこからは学習指導要領解説にあった「日本漢文」とは、上代以降、近世に至るまでの間に日本人がつくった漢詩と漢文をいうこと、「日本人の思想や感情などが、漢語、漢文を通して表現される場合も少なくなかったこと」を史的に理解することが困難な状況にあると考えるのである。当然、それは教員が単元を扱う時に適宜、作品や理解を補足、補充すればよいという考え方もあり、そのように対応されてもいるのであろう。だが、国語教師であっても全ての文学領域に精通している訳ではないであろうし、特に「日本漢文」と言う当該分野は最も手薄な領域であろうとの想定は、強ち外れてはいないと思うのである。

4. まとめ ―課題と展望として―

次期学習指導要領に関わる教科書についての今後の流れを確認しておく、令和2（2020）年度に教科書の検定が行われ、翌令和3（2021）年度に各高等学校に採用のために配付がなされることとなり、その教科書を使つての授業が令和4（2022）年度より始まることとなる。さて、次期学習指導要領での教材の扱いからすると、高校1年生で使う「言語文化」の教科書にも高校2、3年生で使う「古典探究」の教科書にも「日本漢文」が載ることになるはずである。対して、現行学習指導要領では「日本漢文」の学習は高校2年生以降であった。先に見た「古典B」の教材の内容は、それ自体は難解なものではな

く、高校1年生が「日本漢文」の導入として「言語文化」の教科書に載せられたとしても理解は可能であろう。ただし、「古典探究」として扱うには適切であるとは言い難いと考える。

ここで先に述べた筆者が問題と考えることをもう一度示すと、作品の内容が勉学を勧める内容が顕著であること、作者／作品の年代が江戸期に偏っていることと、これだけでは「日本漢文」を「日本」で「漢文」が作成されてきたものとして考える意味が理解されない状況になっているのではないかと言うことであった。その上で「言語文化」や「古典探究」で指摘されていた文学史や文化史的な繋がりや流れを意識するならば、やはり導入としても現行の教材、作品では不十分に思われるのである。また高校2年生以降の古典学習が「古典探究」となることを考え合わせれば、もっとも現在の所「探究」にどれ程の重きが置かれるか、置くべきか、実際に授業を行うに際して不安視されてはいるのだが、高校1年生の「言語文化」と高校2、3年生の「古典探究」は繋がりを密にし、発展的な学習となるような教材の設定が求められるべきではないかと考えている。「教材ありきの教科」とこれも国語の学習に際してよく言われることであるが、探究活動を考えるのであるならば、従来からの「教師の」慣れ親しんだ教材を離れ、新しい流れを創るべきではないかと考える。

それについての詳しい考察は、稿を新たにしたいと思うが、現在の「古典B」の教科書には「日本漢文」についてのコラムが載っており、そしてそれらに先立つ「国語総合」の教科書には日本の古典として「漢文」を学ぶ意義を説いた、1年生の漢文授業の最初での使用を想定した導入のための文章が用意されている³⁾。例えば本年度本校で使用している大修館書店『国語総合 改訂版 古典編』（国総 345）には、「漢文入門 漢文とは」があり、そこには、

私たちの祖先は、漢字・漢文が伝来するまで文字を持っていなかった。しかし、中国から漢字がもたらされると、それに日本語を当てはめて読むことや、さらに漢字をもとに平仮名や片仮名を作り出して日本語を表現することを工夫し始めた。（中略）中国の文章に倣って漢文で表現することが日本人の文章表現の基本となったのである。歴史書や律令などの公的文章はもちろんのこと旅行記や日記のような個人的な文章も漢文で書かれ、その伝統は明治まで続いた。漢文は、自己表現までもその利用なくしては不可能なほど、日本文化の根幹を成すものとなったのである。

と書かれている。つまり、このような作品の羅列ではない文学史の文章を基として、それを学ぶための作品掲載となってもよいのではないかと考えている。

古典の学習は「日本漢文」だけではなく、所謂、日本文学、本来の漢文、そしてそれらを理解するための文法などの言語知識の学習総体の中で考えられるべきことは当然であるが、漢文を利用して日本文学を生み出す素となった「日本の漢文」について、今回の学習指導要領の変更を機に今よりは目をむけるようにしてはどうかと考えるのである。

注記

- 1) 先行研究として、宮崎洋一氏による次のような教科書調査がある。「中学校・高等学校の国語の教科書に掲載された漢文の教材一覧」（広島文教女子大学『文教國文學』56 2012.2）、「中学校・高等学校の国語の教科書に掲載された漢文の教材一覧（その2）」（広島文教女子大学『文教國文學』59 2015.2）、「中学校・高等学校の国語の教科書に掲載された漢文の教材一覧（その2-2）」（広島文教女子大学『文教國文學』63 2019.2）である。宮崎氏の調査はその題に示されているように、中学校と高等学校の教科書に載る漢文全てを対象とするもので、そこには形式は異なるが本稿で示した各教科書に載る日本漢文が一覧に纏められている。しかしながら、逆に中高の漢文全てを対象とす

ることから、本稿で考察対象とした「日本漢文」への言及は、「日本の漢文もそのほとんどが高等学校「古典」（科目としての「古典B」を指す—引用者注）でとられている」（『文教國文學』56）に留まる。

- 2) 「古典B」20種類の教科書の中で「日本漢文」を単元・教材として掲載しないのは、大修館書店「新編古典B改訂版」（古B342）と文英堂「古典B」（古B356）であり、表の見やすさを配慮して、除外している。
- 3) ただし、残念なことに「古典B」における「日本漢文」に関するコラムも掲載するのは4社4種類のみであり、高等学校での漢文学習の最初となる「国語総合」においても本文中で示したような導入の文章が全ての教科書に載せられているわけではない。